

すると、実直で真面目な人間でないと務まらないのかもしれない。そう、彼のように。

「社長、そろそろ」

百件を超える業務メールをチェックしていると従業員から声がかかる。今日のヒーローショーはショッピングモールでのステージだ。機材を積んだ車に乗り込み、戦闘員である従業員たちと現場へ向かった。モールの担当者や打ち合わせ、ステージと音響機器の設置。慣れたもので滞りなく進む。あらかた準備が整ったところで今日の主役、ローカルヒーローが到着する。

「どうも、お世話になります」

「いえいえ、こちらこそ」

よろしく願います、と挨拶を交わし、リハーサルに入る。

ステージは子供たちの歓声に包まれて幕を閉じた。

ヒーローに倒された悪役、つまり社長以下悪の秘密結社従業員は、愛想を振りまくでもなくステージ裏で撤収作業に入る。目の前にあることは黙々とこなす。それが彼の美学。彼の背中を見て憧れる従業員もいる。従業員だけではなく、ときにはファンレターが届くことだってある。

認知度を上げ、警戒を解く。信用を得ることは現代日本において、力を得ることとはほぼ同義である。

こうやって「悪役」としての活動が知られば、世界征服の活動は容易になる。本当に悪事を働いていても、「またショーをやっているんだな」と一般市民からはスルーさ

な活動を積み重ねていかなければならないようだ。もしか

不況にあつて悪の組織とは、このようにコソコソと地道

の増強も決して怠っていない。

を新たな怪人の製造に投資していると言うのだから、戦力

をつけていだろう。関連グッズの売り上げの二〇パーセント

資金を稼ぎ出す道を見つけた彼には先見の明があつたと言

ふに仕事を求めている。長く続く経済の停滞の中で、活動

当地ヒーローが乱立する中、悪役に徹することでコンスタ

表向きはイベント会社だ。ヒーローショーを企画・運営

し、彼や従業員が悪役として出演もする。ゆるキヤラやご

表取締役である。

彼の名前はヤバイ仮面。株式会社悪の秘密結社の若き代

地に施された銀色の装甲。黒いメットから紫色に光る瞳。

しまつていなのだ。朝の清掃が終わると彼は変身する。黒

とした理由がある。彼は、業務時間中はその姿を変えて

従業員でも彼の顔を知らない者がいる。それにはちよっ

の街の悪くないところだ。

に挨拶をする。そこそこ都会だけれど立派に田舎であるこ

の正体を知っているわけではない。なんとなく見慣れた人

社の従業員もいる。挨拶をする人々は、けれど、全員が彼

同じピルに勤める人たちが出社してくる。中には彼の会

「おはようございます」

彼が一企業の社長であることは、あまり知られていない。

チトリを持ってビジネススーツ姿。見た目にもまだ若い

ル前の清掃をしているのは、見慣れた毎朝の風景だ。等々

通り掛かつたおぼちやんが話しかけてくる。彼が雑居ビ

「いつも朝からご苦労様です」

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはようございます」

れやすくなる。通報されなければ本物のヒーローが現れる

会社での業務を終えて戸締りをする。基本的に、従業員

彼は清掃活動が好きだ。彼が手に入れたいものは美しい

ほんの少し前までオフィスでもあつた自宅は、今はもう

彼一人しか踏み込む者はなく、寂しい夜も、ある。

彼は地球を手に入れて、地球上の全人類から、愛された

【了】



ヤバイ仮面 二次創作

彼のお仕事

著 佐藤こおり.txt

こんにちは、こおりです。お読みいただきありがとうございます。この小説は、株式会社悪の秘密結社「ヤバイ仮面」の社長、ヤバイ仮面が、業務時間外に清掃活動をするというお話です。清掃活動は、彼にとっての大切な時間です。彼は、清掃活動を通じて、自分自身を磨き、そして、社会に貢献したいと考えています。この小説は、彼の日常の姿を、そして、彼の心の中の世界を、描いています。どうぞお楽しみください。